



### 家 庭 童 話 三

#### 熊の 畫 廊

小熊がまだ歩行も出来ない時分の事でした。其頃はメリーさんだつて、やつとお粥を食べさせられてゐましたが、母熊は小熊を揺つて寐させて居りました。

或日小熊は新しい歯が生えかゝつてゐて、むづがりますので、母熊は半時間もかゝつて、やつと寝かせつけました。そつとお二階の寢床へ連れて行きましたが、突然に大熊が跳り始めて、大きな聲で歌ひながら、お勝手中飛び廻りました。

タアデ、ダム、ダム

タアデ、ダム、ダム

「いけませんよ父様！ 小熊が起きるぢやありませんか！」

母熊がたしなめますと、大熊は大きな前足で以て、その大きな口を蔽へるやうにして、歌よのをよしました。

でも其時囀の連中が饅舌ながらヨタヨタ、三熊のお家の前を通つて行きました。母熊にはそのお饅舌が、何時よりも際立つて大聲のやうに思はれました。

「囅さん、どうぞおよし下さい、家の小熊が起きますから」

母熊は頼むやうに云ひました。囅達は翼の下へ首をかくしてしまひました。

直ぐ又鳥が三羽飛んで来て、小熊の寐てる窓許の木に止つて鳴きました。

「かあ、かあ、かあ！」

「どうぞお願ひです、そんなに大きな聲をなさないで下さい」

林の樹頭をこさへてゐた母熊は云ひました。熊の中の樹頭がやつと出来上つた頃、森の樹頭が来たものですから、小熊はたうとう眼を覺してしまひました。鬼は勢込んで大熊を叩きます。

ドンドコ、ドンドコ、ドンドコ

次は二百匹の熊と三百匹のきりんすが琴と胡弓の合奏です。ギーチオン、コロ、コロ、ギ

### 熊 さん 系 代 美 知 代



イチオン。

熊も負けかに五絃琴をならします。ガア、ガア、ガウ、ガウ。

海狸が尻尾を叩きます。ザザ、トン、トン、ザザ、トン、トン。

小熊は母熊を呼んで泣きました。母熊は抱こして下へ下りました。

「そうら、父様のお時計をあげようね」父熊が云ひましたけれど、樂隊の騒音が大聲ですもの、

チツク、タツクとお時計の小さな音など、小熊には聞えません。

「父様を見てゐて御覽！」

タアデ、ダム、ダム

タアデ、ダム、ダム

父熊が歌ひながら踊つて見せますと、小熊は泣くのをやめて笑ひ出しました。母熊も笑ひました。それから小熊は面白く遊びましたけれど、その日はそれきり寝ませんでした。

#### 熊の 病 氣

父熊は旅行に出掛けて行きました。留守になつて二日目でした。母熊は薪箱が今少しでからつぽになりさうなのに気がつきました。

そして小熊に頼んで、一杯にして置くやうに云ひつけました。でも小熊は母熊の云ひつけ通りする代りに、裏口の戸の處に坐つたきり、前足で以て頬杖をついて、何時までも積木の山を見詰めて居りました。

「何うしたの、何處か悪くつて？」母熊が覗きました。

「そんなでも無いの」でも何だか眼付きが變でした。

「可哀相だね、病氣なんだよ、どんな風だい？」

「何だかだるいの」小熊は積木の山を見上げながら云ひました。

「此方へ来てお寝なさい」

母熊は心配して云ひました。暖かな鬨氣だつたので、小熊は横になると直ぐ寝入つてしまひま

した。

父様鹿が通るのを見掛けると、母様熊は戸口へ竹つて臥きました。

「あの、一寸と伺ひますが、あなたの處では、お見さんの御病氣にどんなお手當をなさいますのでせう？」

「私共では體をやりませんがね、お宅の小熊さんがお悪いのですか？」

父様鹿はお見舞を云ひました。

「何だかさうらしい御座いますの？」

「鬼に角鹽をあけて御覽なさい」

父様鹿は歸つて行きましたが、その途中で小熊の病氣の事を皆に告げました。

母さは直ぐそれからそれへと傳はりました。小熊が寝てる間に、家中見舞客で一杯でした。そしてテーブルの上にはお菓が山のやうに積まれてありました。鬼の母様は加蜜列茶をよこしますし、母様鹿が鹽を持つて来ますと、海理は楊の小枝を持つて来て居りました。

「母様がさう云ひましたがね、この楊の樹皮を咬ませなさるといひさうです」海理が云ひますと、狐の奥さんが云ひました。

「深い泥の中へ轉さなければいけないつて、私共で云て居ましたよ」

「嫌だ、嫌だ母さん、お薬なんか嫌だようつてばー」

小熊は泣き出しました。小熊は怖くつて、本當に病氣のやうでした。

「今に私が犬はくか茶をお飲ませませう、それで若し餘り嫌がるやうでしたら、私お鼻をつまんでお飲ませします」

山猫の奥さんが云ひました。

「私もお鼻をつまんで鹽をお飲ませします、何しろ一番のお薬でものね」母様鹿も負けずに云ひました。

「如何したんだ、まあ私に見せて御覽」

お客様達は皆心附を退いて、父様熊をお部屋に通しました。

「どうしてこんな急病が起つたんだい？」

父様熊は小熊の舌を見ました。脈を數へました。それから空つほになりかゝつた薪箱の話を聞きました。そして云ひました。

「ナニ、真ぐよくなりますよ、ねえ小熊、お前起きてあの薪箱を一杯に出来るだらう」

「出来ませんとも父様！」小熊は答へました。そして跳ね上つて積木の方へ駆け出す拍子に、藥を皆な飛ばしてしまひました。

間無しに、お見舞のお客様達は、積木の崩れる音を聞きました。ドタン、ドタン、ドタン、ドタン、それからボン、ボンと薪箱に投げ込まれる音も聞えます。

薪箱が一杯になりますと、母様熊は眼を拭きました、母様熊は嬉れし泣きに泣いたのでした。

「今度目にお見舞のお子さんが病氣におなりでしたらね、私犬はくかのお茶を差上げますよ」山猫の奥さんが云ひますと、母様熊は云ひました。

「鹽がよござんすよ、鹽が」

そして静かにお鼻をさして歸つて行きました。

「よくおなりなすつて本當に嬉れしう御座いますわ」

海理は自分の持つて来た楊の枝をかじりながら云ひました。

小熊はその明日も薪箱に薪を入れました。が、こんどは些少もぐつつきませんでした。

### 父様熊の失敗

其日は本葺取りで、父様熊も母様熊も朝早くから出掛けて行きました。

「加蜜列茶が一番甘口のやうですから飲まして見ませう」

母様熊は斯様云つて、

「さ、好い見だから、鬼の小母さんから貰いたお薬をおのみなさい、さ早く」

「嫌だ、嫌だ、お薬なんか嫌だつてばよう！」



小熊は云ひ張りました。

「自由の利かないやうに、手も脚も押へてた方がよござんすよ、私がお鼻をつまんであげますから、いつその事、犬はくか茶を飲ませておしまひなさいよ」又しても山猫の奥さんが云ひました。

丁度其時です、父様熊は旅行から歸つて来しました。

た。小熊は車に乗せて連れられました。

「今晚は都合で歸れないかも知れないものね、其代り歸りには此車が役に立ちますわ、木箱を入れるのに丁度よござんすよ」

母様熊は云ひました。木葺取りの場所迄は七哩もありましたが、その途々小熊はいろんな歌を歌ひました。それから又色々な事を聞きました。



した。歌つては訊き、訊いては歌ひ、随分面白くつて、煩さう御座いました。

もう彼れはお晝近くなりましたが、父様熊も母様熊も、一生懸命木箱をむしつて居りました。すると其時小熊はチャリとメリーさんを見掛けました。メリーさんは母様熊の伯母様だの、小さな従妹だのと

一緒に他の處で木苧を取つて居りました。

「私おどかしてやり度いな、女や子供をおどかしてやり度いな」

「何處にその女や子供があるんだい？」父様熊が訊きました。

「彼處にゐるんだ、彼處に！一人はメリーさんなんだから、おどかし度いな」

「誰も男はゐないのかい、本當に母様熊が訊きました。

「本當にゐないんですよ、だから私おどかしてやり度いな」

「どんな風にしておどかすの？」

父様熊が又訊きました。

「私ね、誰にも見えないやうに母の木の根っこを削つてるの。それからメリーさんの傍まで行くと突然飛び出して、ウ、ウ、ウツツて怒鳴つてやるんだ、ね、屹度驚ろいて逃げ出すから、其時又怒鳴つてやるの」

父様熊と母様熊は顔を見合つて笑ひました。でも父様熊は低い聲で云ひました。

「よく云つて置がね、女や子供をおどかしやいけません。解つたかね、屹度だよ」

「でも私逃げ出す處が見度いんだもの」

「大丈夫おどかしやしませんよ、でも、でも男の人なら可いんでせう父様？」

「左様さ、男ならかまはないだらう、だが女や子供をおどかしやいけないよ」小熊はそれつきりメリーさんの事は忘れてしまつて、遊んで居りました。

「キヤツ！」

メリーさんの母様熊は大きな熊を一目見たきり驚ろいて、突然メリーさんの腕をつかんだまゝ逃げ出しました。その聲を聞きつけた伯母さんも従妹も皆な逃げ出しました。折角ひしつた木苧も何も憂無しにこぼしてしまつて、一生懸命逃げて行く様子は、まるで虎がお獅子のやうな怖い歌に追はれてゐるやうでした。

父様熊は初めのうち呆氣に取れて居りましたが、小熊が面白がつて笑ひながら小山を駆け下りますと、母様熊も笑ひました。でも小熊がメリーさん達の跡を追つて行きさうになると、母様熊は引きとめました。

「女や子供をおどかしやいけませんよ」

「今のは父様の失敗だよ知つてたら決しておどかしやしなかつたに」それから父様熊と母様熊と小熊の三熊は手を纏ぎ合つて跡ををどりました。

タアデ、ダム、ダム  
タアデ、ダム、ダム

公園の散歩

お天気の好い朝でした。まだ人間の兎達が寢床で寝てゐるうちに、三熊達はもう散歩に行きました。

「公園へ行かうかね」

父様熊はステッキを振りながら云ひました。小熊は公園が大好きでしたから、大抵びで跳ねました。

で居りました。

一時間位経つたでせうか、小山の一番上に居た小熊は、下の方を見下してゐるうちに、不思議な事を見掛けました。

父様熊と母様熊が此方の方の木苧林で苧をむしつて居りますと、丁度その彼方側の林で以て、メリーさん達の母様熊の、伯母様や従妹と一緒に木苧を取つて居りました。

父様熊も母様熊も、メリーさんのお家の人かそんな近くへ来てゐるとは気がつきませんでした。勿論メリーさんの方だつて大きな大きな熊が、すぐ傍に来てるなどと知る筈もありません。

「小熊は面白くつて居りません、一生懸命見て居りました。するとメリーさんが母様の傍へ寄つて行きました。

「誰か彼處の木の處にゐるやうよ」

メリーさんはそつと母様に云ひつけました。小熊には何を云つてるのか解りませんけれど、兎に角話をしてゐる事だけは見えました。

「木の葉が動いた音ですよ」

「でも母様、何だか音がしましたよ」

二度目にメリーさんが新様云つた時、父様熊は枯れた枝の上を歩いて居りました。

「小鳥でも飛んだのでせう」母様熊は相變らず氣にもとめないやうでした。メリーさんは又そつと小聲で云ひました。

「母様、屹度誰か来てますつてばー」

「だから小鳥が飛んだんでつて云つてるでせう」

メリーさんの母様がやつと返事をするかしないかに、父様熊は林を這つて、もう少しでメリーさんの母様に突き當りさうになりました。

餘り急いだものですから、三熊達は其日輪影にも嫌々にも小鳥にも、誰にも朝の挨拶をしませんでした。小熊は路傍の草もきんほうけも見ないで歩きまわりました。公園へ行くのが嫌らしくつて、花なんぞ挿んでゐるひまはありません。

公園は面白う御座いました。終に小熊は「子供の丘を見つけると、もうぶんこも嫌、上下板も嫌、他の遊びは皆な嫌になつてしまつて、唯「子供の丘」の急な急な坂道をすべり度いので夢中でした。

「お前なんぞこの坂をすべらうものなら、一遍にころがつてしまひます」父様熊が云ひますと、母様熊も云ひました。

「本當ですよ、ころがりますよ」

でも三熊は小さな、小さなこの小山を登つて行きました。小熊を風中にして、父様熊が此方の側に、母様熊は彼方の側に並で行きました。

皆なで小山の上に並んだ時、父様熊は急な急な坂道を見下しながら云ひました。

「すべらうかね」

「すべりませうよ」

母様熊は斯う云つて、小熊の小さな前足をしつかり、しつかり持ちました。

「では、ワン、ツー、スリー」

父様熊は片々の小熊の前足をしつかり持つて云ひました。

ズル、ズル、ズル！  
ズシリ、ズシリ、ズシリ！

三熊は小山をすべつて下ります。初めのうち小熊は、急な急な坂道を、早く早く走つて行きましたけれど、終に下まで降りつくまでには、

足なんぞ些少も土については居りません。まるで父様熊と母様熊に  
るされて、空を飛んで行つてるやうでした。

何度も何度も同じ事を繰り返してやりました。小熊は面白くつて  
堪りませんでしたが、父様熊も母様熊も、そんなに何度も繰り返  
してやつてるうち、息が切れて疲れて来ました。それに母様熊は孔



雀を見て行き度いと思ひました。そして父様熊は水が飲みたくなりま  
した。

「人間の足は皆な終日やつてるんだもの。私一人でやつてたつて可  
いでせう」

父様熊云つて小熊は願ひました。

振り返つて様子を見てゐた母様熊が、大急ぎで駆けて来て云ました。

「可哀相にね」

「お鼻が痛い、お鼻が痛い」

小熊は泣き出しました。痛い雪です、お鼻はすりむけて、頭には幾  
つも糞つもこぶが出来て居りました。母様熊はその頭の小ぶへ一タキ  
ツスしてやりました。

小熊はもつと、もつと大きな聲で泣き出しました。父様熊はその泣  
き聲が公園の番人に聞えやしないかと心配しましたが、丁度其時彼方  
の隅のお池の方で聲がしました。

「父様、早く、父様、早く、熊が三匹居りますよ、アラ、アラ、一匹  
はまだ子供です」

父様熊が見て見ると、メリーさんが此方を指しながら立つて居りま  
した。

ハツと思ふ間に父様熊は小熊を抱いて公園を逃げ出すと、母様熊も  
直ぐ後から續いて駆けてました。駆けて、駆けて森へ来るまで駆けて通し  
ました。やつと立止つて息を入れながら四周を見廻した時には、もう  
誰も三熊のあとをつけて居るものはありませんでした。

「私解つたわ、父様や母様の云ふ事きかないと駄目ですね」

小熊はこぶだらけの頭を撫でながら云ひました。

「左様ですとも」云ひながら母様熊は木の葉を取つて、小熊のすりむ  
けたお鼻へはりました。

### 小熊の蟾蜍

或日小熊がお家の傍の森で以て遊んで居りますと、蟾蜍が鳴いて居

「いけませんよ、人間の見たつてそんなのはあなたのやうに小さくは  
ありません、小さな兒は皆な、父様や母様に手をひかれてでなくちや  
駄目ですよ」

母様熊はゆるしませんでした。

「でも私一人ですべりたいんだもの、大丈夫ですつてば！」

小熊はすねたやうにして云ひました。

「よろしい二人でおすべりなさい！」

父様熊は大きな聲で云ひました。

「でも怪我をするといけませんよ」

母様熊がとめましたけれども、父様熊は云ひました。

「その方がいよのだらうよ、やつて見たら解るんだ、さあ、私達は孔  
雀を見に行きませう」

小熊が一人で小山を登つてゐる間に、父様熊と母様熊は彼方の方へ  
行きました。やつこらさ、やつこらさと登つて行つた小熊は、小山が  
前よりもつと險しくなつたやうに思はれました。でもやつとの事で  
登り切ると、脚を振つて敷へました。

「ワン、ツー、スリー」

小熊はすべり出しました。ズル、ズル、ズル、父様熊と母様熊に手  
をひかれてゐた時のやうに急な坂道をすべつて行きます。ですけれど其  
何時の間にかコロリ、コロリ、コロリと早く早く転がつて居りました。  
父様熊が下下さると好いのに、母様熊が下下さると好いのに、小熊は  
心細くなりました。今に落ちてしまやしないかしらと心配でしたが、  
コロ、コロ、ゴットンと音がしたと思ふと小熊は泥だらけになつて、坂  
の下に轉がつて居りました。

りました。

「何處にゐるの、蟾蜍さん」

小熊が訊きますと、蟾蜍は苦しげな聲で云ひました。

「あなたは確か小熊さんですね、私はこんな深い穴へ落ちて、出る事  
が出来ないで困つてます」

「出してあげませうか」

「どうぞ後生ですからお早くどうぞ、私もこんな水気の些少もない  
穴なんぞに居られやしません、御助け下さつた御恩は忘れませんよ、  
一生あなたの家来になつて何でも御用をつとめます」

小熊は可笑しくつて堪りませんでした。こんな小ほけな蟾蜍が家来  
になつて御用をつとめるなんて云ふんですもの、でも小熊は蟾蜍を穴  
から引上げてやりました。

「オヤ、蟾蜍さん、病氣なの？」

小熊は乾笑して訊きました。蟾蜍はぐつたり腹を切つて居りました。  
「水を水を、どうか水を下さいませ」

せつなげに頼みますので、小熊は兎に角駆けて行きました。

「さあ早くお飲みなさいよ、蟾蜍さん」

水を持って来て云ひましたが、蟾蜍は飲まうとしないで云ひました。

「どうぞ早く私の體へかけて下さい、蟾蜍は誰だつて口からは飲みま  
せん。體の皮から飲むのです」

不思議でしたけれど、小熊は云はれた通りにしてやりました。見る  
まに蟾蜍は元氣よくなりまして、何時もの通りに肥つて来ました。そ

して一寸と舌を出したと思ふと、何時のまにか飛んでる蠅をその先  
にからんで、口の中へ持つて行つてしまひました。

「どうしてするの蠅さん、随分早いね、私には出来ないよ」

「何でもありません」

行水を使つてから、すつかり元氣よくなつた蠅は云ひました。

「私の舌を御覧なさい、前の方についてるんですけど、おまけにこ  
んなにもべとついてるんですけど、蠅なんか逃げられやしませんよ。で  
も私お腹が空いて、これからまだ蚤虱を十四位、そしていなごを五  
六十四も食べない事には、三熊さんのお家までとでも歩いて行かれま  
せん」

ですから小熊は蠅に別れて、森の中で遊んで居りましたが、お蠅の  
御飯にお家へ歸つて見ると、蠅が戸口の處に居りました。すつかり  
綺麗な新しい若物を着てゐます。そして小熊に云ひました。

「着物を着かへましたよ小熊さん、でもあなたが御覧ならないで惜  
しい事をしました」

「先の古い若物は何處へやつたの」

小熊が訊きますと、蠅はすまして云ひました。

「すつかり呑み込んだやいましたよ」

「如何して？」

「私の上衣は着て以て兩方へ開けるやうになつて居りますの、ですが  
私ぐつと足を引き出しちやつて、顔一杯着物を引かぶります。それ  
からお口の中へ一口に吸ひ込んだまひます。私達の仲間は一年にどう  
したつて四度着物を着かへますが、何時でもこんな風で以て着かへま

す」

小熊が聞いて居りますと、蠅は續けて云ひました。

「ではね小熊さん、父様熊にさう仰有つて下さい、蠅はお畑で働い  
て居りますつて、ね、よござんすか、私は今日からあなたのお家の家  
来です」小熊が家へ歸つてその事を云ひますと、父様熊は甚く喜んで



居りました。

「それは好い、それは好い！」

蠅は本當に三熊の家來になつて、朝から晩まで終日中働ら  
ました。第一番に父様熊の大體ひな蠅を捕りますし、それから蠅だの  
何だの、いろんな羽虫を退治してくれました。